

第 5 回 SPARC Japan セミナー2012

「Open Access Week — 日本におけるオープンアクセス、この10年これからの10年」

OA と図書館： IR は研究を支えるインフラとなり得るか？

栗山 正光

(常磐大学 人間科学部現代社会学科)

講演要旨

これまで日本の大学図書館は業務の機械化、オンライン共同目録及び ILL システム (NACSIS-CAT/ILL) の構築、電子図書館プロジェクト、電子ジャーナルの導入といった事業を次々と計画し実施してきた。それらが曲がりなりにも実現した後、新たな目標として設定されたのがオープンアクセス (OA) 擁護と機関リポジトリ (IR) 構築である。IR は自機関の研究成果を OA で提供する電子アーカイブだが、肝心のコンテンツがなかなか集まらないのが世界共通の悩みである。海外では研究者に対する OA 義務化の動きが高まっているが、日本では義務化を行っている機関はほとんどなく、PR 活動によって地道にコンテンツ拡充を図っている。また、デジタルリポジトリ連合 (DRF) という組織を結成し、メーリングリストによる情報交換、イベントの開催、研修の実施、PR 誌の発行、さらには国際会議への参加や海外文献の翻訳などさまざまな活動を行っている。ただ、これまでの事業が図書館の内部で努力すれば成果が上がるものだったのに対し、OA/IR 事業は研究者や出版業界さらには研究助成団体の動向に大きく依存している。IR が研究を支えるインフラとなるためには、そうした関係者との密接な関係構築が不可欠である。



栗山 正光

デジタルリポジトリ連合 (DRF) アドバイザー。常磐大学にて司書課程担当。1980年東京大学文学部卒。筑波大学附属図書館、琉球大学附属図書館勤務を経て、2002年4月より現職。

プチ「坂の上の雲」

私は今、司書課程の教員をしています。もともと大学図書館員でしたので、そのころの思い出話も含めてということで、気楽にお聞きいただければと思います。

1980年代は、図書館業務は変革期を迎えていました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、明治時代の人たちが坂の上の白い雲を目標に、一生懸命這い上がって日露戦争に勝利したという話ですが、それに掛けて図書館版のプチ「坂の上の雲」と言えるかもしれません。

1980年代の大学図書館は、通常業務の機械化に始まり、カード目録がオンライン目録に替わる、それから紙の冊子体の抄録索引誌が文献情報データベースに替わるというように、いわば近代化していったのです。それがピークに達したのが、全国規模のオンライン共同目録および ILL システム、すなわち NACSIS-CAT/ILL の完成ではないかと思われます。これは今から振り返っても、業務効率の劇的改善に成功した事例ではないでしょうか。

ただ、もちろん世の中の流れがそこで止まるわけではなく、目録情報が電子化されれば、今度は本文自体が電子化されて提供されるという方向に向かうわけです。大学図書館も NACSIS-CAT/ILL 完成の後、本文自体の提供に向け、電子図書館という形でいろいろなプロジェクトが始まりました。日本の電子図書館プロジェクトはアメリカの DLI (Digital Libraries Initiative) をお手本にしたのだと思いますが、幾つかの大学図書館に予算措置をして、主に紀要と貴重書、簡単に言えば著作権の問題のないものを電子化して画像提供するというを行いました。また、NII が、NACSIS-ELS (Electronic Library System) といって、学会誌を画像で電子化するというプロジェクトを行いました。

さらに商業出版社がこぞって学術雑誌を電子化し、電子ジャーナルが試験的段階から本格的に商業ベースに乗って各大学図書館に導入されていくという時期を迎えます。このときに大学図書館はコンソーシアムを組み、価格交渉を行いました。ここで生まれた「ビッグディール」は、簡単に言えば抱き合わせ販売ということなのでしょうが、スライスした食パン以来の大発明だと高い評価をする人もいます。

日本の大学もコンソーシアムを組んで交渉して、順調に導入が進んできました。ただ、電子ジャーナルの導入が日本でうまくいったのは、円高の影響が非常に大きかったように感じます。いわゆるシリアルズ・クライシス自体は未解決のまま推移していったという印象を受けています。結局、前の NACSIS-CAT/ILL のような達成感がないまま、モヤモヤを抱えたまま次のステージに向かうことになりました。

大学図書館の新たな目標と

国立情報学研究所による支援

21 世紀に入り、大学図書館が新たな目標として設定したのが、オープンアクセスの擁護と機関リポジトリ (IR) の構築です。機関リポジトリとは、自機関の研究成果をオープンアクセス (OA) で提供する電

子アーカイブのことで、しかし、入れ物をつくっても肝心のコンテンツがなかなか集まらないというのが世界共通の悩みとなっています。

そのため、海外では特にオープンアクセスの義務化、セルフアーカイブの義務化という動きが出てきました。NIH のような研究助成機関もそうですし、ハーバード大学を含む一部の大学でも義務化しているようです。ただ、日本で義務化を行っている機関は、一つか二つは出てきましたが、今のところほとんどありません。いかにも日本的な、PR 活動で地道にコンテンツを増やしていこうという動きになっています。これは「ひたひた」という日本語で表していますが、なかなかいい言い回しではないかと思います。

さて、大学図書館のそのような動きに対して、NII ではさまざまな学術機関リポジトリ構築連携支援事業を行っています (図 1)。例えば、JAIRO という日本の機関リポジトリのコンテンツ横断検索サービスや、JAIRO Cloud という機関リポジトリを持たないところにシステム環境を提供するサービスを行っています。そのほかに、公募によって事業委託を行い、資金提供をしています。例えば、数学ポータル構築 (北海道大学)、機関リポジリアウトプット評価標準化 (千葉大学)、全国遺跡資料リポジトリの構築 (島根大学) などがあります。

さらに、デジタルリポジトリ連合 (DRF) の支援も行っています。実は私は DRF のアドバイザーの一人として末席を汚しているわけですが、これは日本の

支援と連携

- [学術機関リポジトリ構築連携支援事業\(NII\)](#)
 - JAIRO (日本の IR コンテンツ横断検索サービス)
 - JAIRO Cloud (IR システム環境提供サービス)
 - 委託事業 (2005 年～)
 - 公募によりさまざまな事業を委託
 - (例) 数学ポータル構築 (北大)
 - 機関リポジリアウトプット評価標準化 (千葉大)
 - 全国遺跡資料リポジトリ (島根大)
 - デジタルリポジトリ連合 (DRF) 支援

5

(図 1)

機関リポジトリ設置機関による自主的な連合組織です。2012年10月現在で144機関が参加しており、事務局は北海道大学の図書館が担ってくれています。活動内容としては、メーリングリストやFacebookによる情報交換や、イベントの開催があります。このオープンアクセスウィークでも、DRFのメンバー機関がいろいろなことをしています。また、研修も実施しています。つい先日も埼玉の国立女性教育会館で、担当者の泊まりがけ研修を行いました。また、PR誌「月刊DRF」を発行し、国際会議にも参加しています。さらに、オープンアクセスの動きは海外が中心なので、さまざまな海外文献を翻訳し、関係の皆さんに読んでいただけるようにしています。

機関リポジトリは研究を支える

インフラとなり得るか

これまでの事業、特に図書館業務の機械化やオンライン共同目録の構築は、図書館内部で努力すれば成果が上がるものでした。ところが、OAとIRは研究者や出版業界、あるいは研究助成団体の動向に非常に大きく依存しています。例えば、グリーンOA、セルフアーカイブの義務付けがあれば、機関リポジトリは存在感を増しますが、ゴールドOAの世界になれば、機関リポジトリは存在意義を失うということです。

私は「メガジャーナル」と聞いて、「巨大蛇鳴」あるいは「巨大邪鳴」という漢字を思い浮かべました。「ジャ」の日本語で思い浮かぶのは蛇と邪です。「ナ

ル」は鳴、ガラガラヘビかヤマタノオロチかというイメージです。つまり、メガジャーナルはIRにとって大きな脅威ではないかという気がするのです。同じようなことをやり、完全に競合するのではないかと思います。従って、関係者との密接な連携は不可欠と言えます。

機関リポジトリあるいは主題リポジトリ自体がインフラとなり得るかという質問に対しては、「なり得る」と思います。「フィンチ・レポート」は、正規の出版を補完する重要な役割をリポジトリが担うべきだとしています（図2）。特に研究データや灰色文献へのアクセス、あるいはデジタル保存の役割を果たすべく、やはり主題リポジトリや機関リポジトリといったインフラが整備されるべきだと書かれています。ただし、「図書館がやれ」とは書いてありません。

また、BOAI (Budapest Open Access Initiative) という、2002年に最初にオープンアクセスの定義を行った有名な会議が今年で10年目を迎え、つい先日、見直しの文書を発表しました（図3）。その「インフラと持続可能性について」という項目で、全ての高等教育機関は、OAリポジトリを持つか、コンソーシアムのOAリポジトリに参加するか、あるいはアウトソーシングでOAリポジトリサービスを利用するか、そのいずれかをすべきだとうたっています。国際的に重要な文書がIRをインフラと位置付けていることは確かですが、ここにも図書館がやれとは書いていません。

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？(2)

- 正規の出版を補完する重要な役割、特に研究データや灰色文献へのアクセス、あるいはデジタル保存といった役割を果たすよう、主題および機関リポジトリのインフラが整備されるべきである。

– [Finch Report](#)より

- 図書館がやれ、とは書いてない

8

(図2)

IRは研究を支えるインフラとなり得るか？(3)

3. インフラと持続可能性について
- 3.1 すべての高等教育機関は、OAリポジトリを持つか、コンソーシアムのOAリポジトリに参加するか、OAリポジトリ・サービスのアウトソースを手配するかすべきである。

– [BOAI10](#)より

- 図書館がやれ、とは書いてない

9

(図3)

なぜ図書館員は OA に肩入れするのか

では、図書館にとって OA とは一体何なのでしょう
か。今、図書館が悩まされている雑誌価格の高騰と
OA は、密接に関わってはいるけれど、基本的に別問
題ではないかという気がします。雑誌価格の高騰が取
まるか、あるいは十分な資金が提供されて雑誌が買え
るということになったら、もうオープンアクセスは要
らないのかというと、そうではないと思うのです。

今までの図書館のビジネスモデルあるいはサービス
の形は、雑誌を購読してそれを提供し、足りない部分
は ILL（図書館の相互利用）によって補完するという
形で来ていました。電子ジャーナルになってもこの基
本的なモデルは変わらなかったわけですが、OA にな
るとこれが根本的に崩壊します。

しかし、ランガナータンというインドの図書館学者
は「図書館学の 5 原則（5 法則）」を唱えています。
その二つ目、三つ目、四つ目には、「全ての読者にそ
の本を」「全ての本にその読者を」「読者（利用者）の
時間を節約せよ」とあります。つまり、閉架（クロー
ズド）の書庫から本を出して開架書庫に並べろ、ある
いは検索のツールを充実させろということですが、よ
く考えてみると、OA 化するとこれら三つの原則が満
たされるのです。むしろ図書館がその邪魔をされていて、
図書館をなくして OA になった方がランガナータンの
原則を満たすのではないかという感じさえ受けてしま
います。

もしも図書館がこれまでの理想を追い求めるのであ
れば、必然的にオープンアクセスに向かうはずで
す。そのときに図書館に何ができるかといえば、
図書館がやれとは書いていないけれども、やはり研究を支える
インフラを買って出るしかないのではないのでしょうか。